様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年４月３０日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19520332
研究課題名（和文）生成文法の極小理論における統語上の連鎖の役割と解釈メカニズムについての研究
研究課題名（英文）Research on the Role and Interpretive Mechanism of Chains in Syntax within the Minimalist Program of Generative Grammar

研究代表者
R・A Martin（R・A MARTIN）
横浜国立大学・大学院環境情報研究院・准教授
研究者番号：30302342

研究代表者の専門分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：生成文法、極小理論、連鎖、コントロール構文、比較統語論

１．研究計画の概要

本研究の目標は、極小理論の観点から、経験的手法で様々な言語（英語、日本語、スペイン語など）の多岐に渡る言語事実を調査することによって、以下にあげる３つの疑問点を解明することにある。

(1)連鎖の存在を示唆する経験的証拠と言うのは、どういうものなのか（連鎖の概念は特定の言語事象の分析にどのぐらい中心的な役割を果たしているのか）？
(2)どの様な言語要素が連鎖を構成するのか？連鎖は、どの様にして、理論で定義されるべきなのか？
(3)連鎖の形成と解釈を司るメカニズムというのは何であるのか？

又、これらの疑問点に取り組む際に、本研究は以下の項目を下位研究課題として構成されるものとする。

①量化詞作用域の曖昧性・選択・再構築効果の性質
②コントロールと前方照応の性質
③拡大投射原理（EPP)、主語の連鎖、主語の解釈の性質
④左方周縁領域（統語構造図作成計画の一環）への移動の性質

本研究の目的は、これらの言語事象を理論的、経験的な視点から解明するのに貢献し、(1)-(3)の疑問点に明確な解答を与えることにある。

２．研究の進捗状況

(1) 2008年に海外共同研究者であるメリーランド大学のUriagereka教授を日本に招聘し、集中的に議論を行うことによって本研究プロジェクトの一環である一連の共同研究を精力的に進めた。又、来日したバルセロナ自治大学のBoeckx教授と打ち合わせを行い、積極的に意見交換を交わすことで研究を進展させた。加えて、国際ワークショップを開催し日本内外の著名な言語学者を招くことで、最先端の分析について広く情報を収集した。Uriagereka教授とは、常時メールを通じて共同研究を遂行し、以下の研究成果を得た。連鎖が一致現象の一つであり、連鎖は一致という基礎的な統語操作の本質から派生されて、言葉の根本を成すものである可能性を示した。従来は先行詞とPROの関係が決定的な説明がなかったコントロール構文においても、一致操作の結果による連鎖の形成が重要な働きを示し、コントロール構文が連鎖の性質を如実に示すものであるという分析を発表した。又、共同発表では統語構造処理に関連する認知メカニズムの処理操作が連鎖形成に深く関与しているという方向性を示した。一連の研究は、コントロール構文を含め複数の意味役割を伴う連鎖形成にも同様の分析が適用できることを示して新たな示唆を与え、統語メカニズムにおける連鎖の役割を明確にし、連鎖の普遍的性質の解明に示唆を与えた。連携研究者である藤井の日本語のコントロール構文における移動分析の研究と相伴って、コントロール構文の性質と分布について、一定の成果を上げた。

(2) 連携研究者である遠藤は、①日本語の文末に観察されるムード・モーダルを表す助詞・助動詞などを用い、シエナ大学のRizzi

教授(海外共同研究者)の共同プロジェクトにて、日本語がロマンス諸語と同種の統語構造図で扱える可能性を示唆し、②統語特有の局所性の原理及び素性の存在を仮定のもと、日本語の周縁領域で観察される言語事象を他言語同様に説明されることを示した。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
（理由）
本研究プロジェクトの研究主題としている連鎖について、日英語のコントロール構文というものが連鎖の存在を示す経験的証拠になり得ることを示し、同一要素が複数の意味役割を担う場合、連鎖の概念が重要な役割を果たしている可能性があることを示唆し、(1)について、一定の答えを与えた。又、連鎖形成に一致という基礎的な統語操作が関与していることを示し、連鎖を構成する要素が一致に関与する要素であることを提言し、連鎖及び連鎖形成が一致操作に基づいて定義されることを示した。最後に連鎖解釈も統語構造処理に関連する認知メカニズムを関与するとする共同研究を進めているので、(2)と(3)の問いにも、一定の解答を得たと言える。これらの成果は国際学会を中心に公表されており、研究は順調に進んでいると言える。
又、連携研究者である遠藤は周縁領域における共同プロジェクトにおいて、統語構造図作成計画に従事し、日本語の右方周縁領域を中心に、助詞・助動詞が位置する機能範疇を明らかにし、この種の右方周縁領域に属する昨日範疇への移動が、ロマンス諸語の左方周縁領域への移動と同様に、統語特有の局所性の原理及び素性の存在が関与していることを示し、この種の統語現象における連鎖の性質・役割についても、一定の示唆を与えた。その研究成果を著書・論文にて公表し、一定の成果をあげ順調に研究を進展させている。

４．今後の研究の推進方策
まず、(1)本研究プロジェクトで得た連鎖形成と連鎖解釈の研究成果を基に、日英語だけではなく、スペイン語・バスク語などのコントロール構文に研究の視野を広げ、比較統語研究を行う。又、コントロール節主語の制御者が明確である強制的コントロール構文だけではなく、非強制的コントロール構文及び副詞節コントロール構文についても研究課題とし、これらのコントロール構文の分布を本研究プロジェクトの研究成果を援用して、説明できるか試みる。そして、複数の意味役割を担う要素を含む同種構文の分析を進め、連鎖の本質及び連鎖形成のメカニズムについて、普遍的かつ深化した研究を行う。最後に連鎖解釈に関するUriagereka教授との共同研究を推し進め、一定の研究成果を得るようにする。尚、これらの研究を具現化するために、海外研究協力者を含む2名の研究者を招聘し、国内外から広く発表論文を集めた国際シンポジウムを行う予定である。そして、国際シンポジウムの発表論文と本研究プロジェクトの研究成果を加えた論文集を編集し、次年度以降に刊行する。
次に、(2)連携研究者である遠藤は、右方周縁領域を中心に、共同プロジェクト統語構造図作成に携り、比較統語研究を背景として、右方周縁領域に存在する機能範疇の普遍的本質を調べ、移動の性質について研究する。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）
① 遠藤喜雄、話し手と聞き手のカートグラフィー、言語研究、136 巻、93-120、2009、査読有.

〔学会発表〕（計 21 件）
① Roger Martin, Control as Uniformity, 日本英語学会国際春季フォーラム, 2009/4/26, 奈良女子大学.
② Roger Martin and Juan Uriagereka, Uniformity and Collapse, Ways of Structure Building Conference, 2008/11/14, University of the Basque Country, Vitoria-Gasteiz, Spain.

〔図書〕（計２件）
① Roger Martin and Juan Uriagereka（他 72 名と共著), University of the Basque Country Press, *Gramatika Jaietan: Patxi Goenagaren Omenez*, 2008, 561-572.
② 遠藤喜雄, John Benjamins Publishing Company, *Locality and Information Structure: A cartographic Approach to Japanese,* 2007, 245.

〔その他〕
ホームページ
http://www.ling.ynu.ac.jp/